

48 【やだやだ】

こどもだって、人生いやなことはある。

そう母親にいったら、

「こどもの、いやなんて、一晩ねりゃあ、忘れるさ」

そんなことはない。

いやなことは、おとなになってもつづきそうだ。

そう懐爺にもいってもらいたくて、そういったら、

「金ちゃんは、よくおばけにとりつかれますねえ。【やだやだ】というおばけにとりつかれたら、簡単にはねえ。なにせ【ふくせいちゅう】というおばけとつるんでいますから。腹、声、虫、と書くんですがね、たとえば、腹のなかで、こんな声をだすんですよ」

やだやだ

やだやだ

ぜったいやだやだ

どうしてもやだやだ

しんでもやだやだ

「そういえば、こえがきこえたのう」

「何ていってましたか」

「おばけはやだやだ、って、きこえたのう」

「じぶんがおばけのくせに、おばけはやだやだですか」

「しょうじきだのう」

「とにかく、【やだやだ】と【ふくせいちゅう】を、両方いっぺんに追っ
ださないといけません」

「やっかいじゃのう」

「たしかにやっかいですが、じぶんでやだやだっているんだから、何
とかなりそうです」

「どうすりゃいいかのう」

「むかしのひとは、煙をつかいました。いぶりだすんですね。しかしそ
れは、きかないおまじないとおなじです。わたしにおまかせください」

そういうと、懐爺はぼくの耳に口をよせて、大声でさげびます。

「【やだやだ】さん、まだまだ、か〜い」

鼓膜（こまく）がやぶれるかとおもいました。

「金ちゃん、【ふくせいちゅう】の、声がきこえますか」

「まだまだ、いうとった」

また、懐爺はぼくの耳に口をよせて、大声でさげびます。

「【やだやだ】さん、そろそろ、か〜い」

「そろそろ、いうとった」

「【やだやだ】さん、でるでる、か〜い」

「でるでる、いうとった」

「しめしめです。もう大丈夫です」

懐爺は祠の奥に消え、ぼくは家に帰りました。

一晚眠ったら、【やだやだ】はでていったらしい。

いやなことも、忘れました。

ただ、しばらく、耳鳴りがつづきました。